
ネクロノミコンの継承者

石座木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネクロノミコンの継承者

【Nコード】

N0269Z

【作者名】

石座木

【あらすじ】

どこにでもいる平凡な高校生、目黒命。ある事をきっかけに、命は想像もしていなかった世界の裏側と、異能者達に関わりを持つていく。

『深書ネクロノミコン』の存在は、稀有な運命をどこまでも呼びこむ。

第一話 『宗教家』栗栖野ミサ

僕の名は目黒命^{めくろみこと}。公立の高校に通う、どこにでもいる普通の男子高校生だ。

勉強もスポーツも平凡の域を出ない、部活動にも参加していない帰宅部で。多くの高校生が浪費する日常を、そのまま形作つたような日々を送っていた。

そんな僕にも、転機とも言つべき事柄がその日に起こった。

高校二年の夏休み明け、始業式の日によつてきた転入生が、放課後の校舎裏に僕を呼びだしたのだ。

転入生の名は栗栖野ミサ、ハーフらしく色素の薄い髪と肌にすつきりとした目鼻立ちの美少女で、この時期にめずらしい転入生という事もあり、すぐに話題になった。

なぜその栗栖野さんに僕が呼び出されたのか、その理由は解らない。今日一日僕は栗栖野さんの周りに出来る人ばかりとは一線退いて、関わらないように過ごしていた為、同じクラスという以外の接点は全く無い。

だが、栗栖野さんに呼び出された事で、僕の心の内には一抹の期待が膨らんでいた。

放課後、校舎裏、転入生、呼び出し、そんなキーワードから健全な男子高校生が連想するのは、おそらくただ一つ。

縁の無い世界だと思っていた、青春というやつだった……実際に試してみるまでは。

(……どこで間違つたのかな。どうしてこうなった?)

自問自答しながら、僕は現在の自分の置かれている状況について考えてみた。

今僕は、どういつ訳か十字架に磔にされている。場所は校舎裏、

正面には僕をここに呼び出した栗栖野さんが居る。

(十字架……まず何でここにこんなものが？ 第一、来たときには無かったよこれ)

等身大というのか、僕の身長よりも少し大きめのその十字架に僕の身体は貼りついていた。

(どういう原理で貼りついてるのかな、これ。釘で打ち付けられているわけでも、縛られているわけでも無い、磁力とか粘着力とかでもなさそうなのに、まったく体が動かないぞ)

何がどうしてそうなっているのか、等身大のその十字架は僕の身体を逃さない不思議な力が働いているみたいに、身じろぎひとつさせてはくれなかった。

「ねえ栗栖野さん……これ、なんだろう？」

いくら考えても、その十字架については答えが出なさそうだったので、僕は目の前にいた栗栖野さんに問いかけてみた。

もちろんこれは彼女にとっても、意味不明な出来事であるとは思っていたが、自力でこの現状を脱するのは無理と判断していた僕は、彼女が誰か助けを呼んでくれることを期待していた。

しかし、僕の期待はまたも打ち砕かれた。

「この状況でその冷静さ、やはり貴方も一般人ではないのですね」

「え？」

質問には無視で返し、栗栖野さんは僕をそう断定した。

「いや、どこをどう見ても一般人でしょ？ 僕ほど自分を平凡と自負するものは、他にそういないと思うよ？」

冷静だという基準で彼女がそう判断したのなら、それは大きな間違いだ。僕は内心では今すぐにも叫びあげて、誰かに助けを求めたい。

それをしないのは、目の前に栗栖野さんが居るから。綺麗な子を前にみつともない所を見せたくないという、少し情けない自制心が働いているからだ。

「偽らなくても結構です。私は貴方の事を、周囲を欺いている事を

知っています」

「え？」

何故かどんどんと、栗栖野さんの中での僕のイメージが断定されている。初対面に近い筈なのに、彼女の口調は、僕の全てを理解しているというような含みさえ感じられた。

(……ひよつとして栗栖野さんって、電波系？ だとしたら、いくら美人でも関わりたくないぞ)

なんとなく彼女からは、関わり合いになるべきでは無い空気が感じられた。しかし、そうは思っても、この現状で頼れるのは栗栖野さんだけだというのも確かな事だった。

「……とりあえず、僕が周囲を欺いてるとか、一般人がどうかはさておいてさ。どういう訳か、僕今この十字架に貼りついていて動けないんだ。悪いんだけど、誰か助けを呼んできてもらえないかな？」
単刀直入にそう頼むことにした。これならいくら電波な相手にも、伝わるだろう。

しかし僕の期待は三度砕かれる。

「質問があります。真実を、心して答えて下さい」

「いや、聞けよ！？ 頼むから聞いてくれよ僕の話も！！」

清々しいまでの無視に、とうとう僕はみつともなく叫びあげてしまった。しかしそれにも栗栖野さんは、眉一つ動かさない。自分のペースを崩さない。

「この問いの、返答如何によつては、貴方はこの場で神の裁きを受けます。注意しておくのは一つ、偽れば無事では済まないという事だけです」

そう言つて、栗栖野さんは手のひらサイズの十字架を一つ、制服のポケットから取り出した。

(いやいやいや、神？ 裁き？ いやいよもつて、関わり合いになりたくない相手だぞ……)

僕の中で、宗教というものに忌避感がある。前に家に宗教の勧誘が来て、それが異様なしつこさで断るのに一苦勞であったというの

と、ニユースの特番で宗教詐欺について報道されていたのを見た事があつたからだ。

それが一部の側面からしか見ていない偏見であるというのは、解っている。宗教が人の心に潤いやゆとりを与える事もあるだろう、それを生きがいに行っている人が居る事も知っているし、僕にはそれを否定する権利も気も無い。

だけど僕は栗栖野ミサという少女から『神』という言葉聞いた時、思いつきり引いた。それはきっと、僕の深層心理の中で現状と結びつくものがあつたからだろう。

十字架に磔にされる、そのイメージがとある神と重なっていたから。

(……まさかね)

この場に呼び出したのは栗栖野さん、電波な事を言つて十字架を取り出した栗栖野さん、十字架に磔にされている僕を前にしても、異様なまでのマイペースさを発揮している栗栖野さん。

それを全てプラスして、イコールで結ぶ。

「……もしかして栗栖野さん、これは君がやったの？」

僕を磔にしている十字架をさして、栗栖野さんにそう問いかけた。

「ええ、もちろん」

ようやく彼女から返つて来たまともな返答は、僕としては否定してほしかった最悪の言葉。

そして栗栖野さんは近づいて来て、その手を僕の身体の中心に向かって伸ばした。

「！？」

僕は自分の目が信じられなくなった。栗栖野さんが手に持っていた十字架が、僕の胸に突き刺さるのを見て、それが真実と認識できなかった。

その理由は、突き刺さつた十字架の感覚が感じられなかったから。どう見ても僕の胸に半分程埋まつた十字架は、何の痛みも触感も僕に与えていない。

「『十字架の裁き（ホーリークロスジャッジメント）』、罪人が否か、全ては神の公正な裁きの元に……」

混乱極まる僕を前に、栗栖野さんはあくまで自分のペースを崩さない。淡々と落ち着いた声音で、彼女は僕に理解できない言葉で問いかけた。

「……では問います。『深書ネクロノミコン』は何処にありますか？」

思えばその時の栗栖野ミサの問いが、僕の平凡な生活を一変させるきっかけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0269z/>

ネクロノミコンの継承者

2011年12月1日00時49分発行